

一歳六^カ月児健診経過観察における遊びグループ指導の展開

その2

上垣内伸子

古屋喜美代

市川奈緒子

山崎 聡子

「幼児の教育」六十二年十月号にて紹介させて頂いた日本保育学会第40回大会発表研究の中で、H児―母―保育者の毎回の活動記録をまとめた表が欠落していたので、改めて載せて頂くと共に簡単な補足説明を加えることにする。十月号のH児の事例検討のうち、五十九頁―六十一頁の「遊びの会」の活動におけるH児の変化について述べた部分は、本表をもとにしたものである。

H児一母一保育者 活動記録

	H 児	母	保 育 者
5月 シートで遊ぶ	挨拶～輪にはいりしっかり参加する。 表情が少なく、動かずに周囲を見まわすことが多かった。1人で喋りわにしている。 発話も少なく、働きかけへの反応も弱い。	どのようにふるまえばいいのかわからずとまどっているようだ。一歩さがって見ていることが多い。	母に対して「～やりましょう」とことばかけをする。 ——保育者が誘ったことだけ母は行った。
6月 小麦粉粘土	挨拶～うれしそうに返事をする。 粉にさわわるのを嫌がり手を出さない。 他の子やボール、他の遊具の方へと動きまわる。 他児への関心が増し追いかける。	H児が他の母子へ近づくとすぐに連れ戻そうとする。 迷惑をかけるのではと気を使っているようす。	終始興味の向く方向へと動きまわるH児に即して動く。
7月 紙ちぎり～ 紙ボール	挨拶～自分の順番まで待てるようになる。 テーマ遊びの中で、興味のあることに対しては集団の流れののっていきが、ないものには全くののってこない。また、好きなことは終わってもやり続ける。 発話量がふえたが、会話は成立しにくい。 保育者のことばかけへの対応にもムラあり。	H児と母。平行遊びのように2人並んで黙って紙ちぎり。 「一緒に何か1つのことをやる」という行動はみられなかった。 母からH児への働きかけ・誘いかけが少ない。	③『Hくんのところへ行こう』 ④『あの子がこへ来ればいいのよ』 三者関係のまたは1対1のやりとり遊びや共同作業をひき出そうと試みる。
8月 フィンガー ペインティング	挨拶～返事の後で手をたいてうれしそうな表情。 えのぐを手でさわわることを非常に嫌がり、絵筆を使って楽しむ。 他児の汽車ごっこにとんでいってはいる。 大声を出し、『一緒に』の楽しさがうかがえた。	全体的に余裕のある態度。 H児に対しても禁止はせず、やりたいことをさせていた。 他児の母とも話がはずんでいた。	母子共に、場に慣れていい感じで参加できていると受けとった。 少し変わってきたと思う。
9月 砂遊び (外の公園)	挨拶～歯科健診で泣いた印象が残っていて保健所に対して抵抗がある様子。 緊張して母にくっついている。 最初は集団にはいっていきなかつたが他児の誘いかけで案外すんなりとはいっていった。 砂に対しても抵抗を示したが、興味が出てきてどんどん遊べるようになっていった。 よくしゃべるが、指示理解の力は弱い。	危険な場面でもH児を迫っていくという行動はない。 「この子は～するのはダメだ。憶病だ」等と思いついてH児を見ているようだ。	H児に対して「(バケツの土を)あけて」「ベタベタしよう」と指示的な誘いかけを多く試みる。 母に対してはH児の(母の持つイメージとは)異なった行動を評価するようなことばかけ。
10月	父と外出して休み。(H児は以前と違って父との外出を非常に喜んだとのこと)		
11月 箱積み木～ おみこし	挨拶～のってこない。機嫌がよくない。 手作業はほとんどしなかったが、全身運動が始まると喜んで参加してきた。	遊びへの参加は消極的だった。 昼食後、『イナイ イナイバー』が始まると、何度も何度も楽しんでた。	個人的な遊び(手を使った作業)の場面で、H児への誘いかけを意識して積極的に行った。
12月 Xマスツリー	挨拶～元気がいい。体操も真似をして一緒にできた。 ツリーの飾りで、食べる真似をしたり他児へ渡したりととてもよく遊んだ。 他の子ども達と一緒に、そり・すもう・汽車ごっこなど関わりを多くもって遊んだ。 表情が大変豊かだった。	H児に対する信頼感が増したのか、ゆったりと2人で楽しく遊んでいた。	母に対して非常に話がし易くなった。うちとけてきたと感じた。
1月 汽車ごっこ	汽車ごっこはお気に入りの遊びでもあり、終始はしゃいで楽しく遊ぶ。他児と一緒にガンボール箱の汽車に乗って、周りの大人に手を振ったり顔を見合わせて笑うといった交流があった。 「おかあちゃん」と大声で母を呼んでは走っていくことが何度もみられた。	H児だけでなく、他児とも遊んでいる。 明るい表情。 スタッフの中に加わって仕事を手伝ってもくれた。 2人めの子どものか欲しくなると保育者に語る。	母の方から保育者にどんどん話しかけてくる。 他の母へも同様に母の方から話しかけていくのを見て驚いた。
2月	母流産にて休み。(3度めの流産。「もう2人めは無理かもしれないが、H児1人でもいいという気持ちになってきた」と連絡があった。)		
3月	彼岸の墓参のため休み。(「別の日なら参加できたのに。最後にみんなに会いたかった」と残念そうだった。)		

「遊びの会」がスタートしたばかりの五月・六月は、大勢の仲間のいる雰囲気になじめずおちつかない子どもが多い。また、その子どもの様子に母親が不安になったり、禁止のことうばかけが多くなったりということもありがちである。「やめたい」「うちの子には無理」というお母さんも出てくるが、昨年度からひき続いて参加しているお母さんからの「うちの子も最初はそうだった」という体験談や、不安の中から時折チラリと見せてくれる子どもも楽しそうな表情が支えとなって次の参加へとつながっていく。H児母子にとっても、五月・六月はそんな時期であり、「遊びの会」の活動に慣れてきたのは八月頃であった。この間に、心理相談員や保健婦による側面からの援助も得られるのが保健所で行っているこの「遊びの会」のメリットでもある。

H児の表情がイキイキと豊かになり、発話量も増し、母親も保育スタッフも「あ、変わったな」と確かな変化を感じたのは、十二月・一月の活動であった。一月のテーマは汽車ごっこ。ダンボール箱を汽車にみたてて走ったり、みんなでつながって走ったりする中でH児と他児との交流する姿が多くみかけられた。また、母親達にトンネル・踏切等の役割をとってもらう場面があったが、H児の母の積極的な動きがめだった。この頃からH児は、さかんに「おかあちゃん」と呼びながら母へ抱きついていくことが始まった。「甘ったれになって」と言いつつも受けとめる柔い母の表情に、H児母子間の愛着関係が着

実に作られていることを感じさせられた。

このH児母子の場合も、一歳六ヵ月児健診を受診する頃、近所に一緒に遊ぶ友達がいな
いという悩みを持っていたが、都市部に住む三歳までの母子にとって、これは割合多い悩
みのようである。筆者らが東京の他の区で一歳六ヵ月児健診時に行ったアンケートでも、
一緒に遊ぶ友だちがいないと訴える者が40%近くおり、発達上の問題を持つ場合にはより
割合が高くなるという結果が得られている⁽¹¹⁾。

私たちの行っているこの「遊びの会」も、一〜二歳児の親子遊びの場を作ろうという動
機を持った活動であるが、こうした動きは現在各地の保健所でさかんになってきている。
「育児相談」という事業を拡大させて定期的な遊びの会や絵本の読みかきの会を組織し
たり、フロアの開放を行う所もあるし、児童館と合同で育児教室を開催したりとバラエテ
ーに富んだ活動がなされている。こうした活動を行う時、何よりも頼りになるのは地域
に住むお母さん方の力に他ならない。私達の活動拠点である練馬区内の各保健所では、地
域の自主保育グループや文庫活動のスタッフに負うところが大である。これからも地域の
お母さん方と交流しながら、活動の輪を広げていきたいと思っている。

参考 (1)第34回日本小児保健学会 一九八七年

「一歳六ヵ月児健診における生活アンケートの導入」